

金剛頂經と理趣經

八 田 幸 雄

はじめに

『理趣經』は『般若理趣分』の内容を密教的に発展整理されたものである。特に東密での『理趣經』の伝統的解釈はすべて不空の『理趣經』に基づいている。不空の解釈は『初会金剛頂經』（三十卷本）をもとになされているが、その内容を整理してみると、(一)五秘密思想の確立、(二)金剛界曼荼羅の教理の導入、(三)初会金剛頂經三十卷本の教理の導入、(四)外金剛部諸天の教理の導入、(五)金剛界曼荼羅の完成、という立場でなされている。

一 五秘密思想の確立

『理趣經』が『初会金剛頂經』或いは『金剛界曼荼羅』の教義によって解釈されるためには、これ等の教義と共通の地盤となる『理趣經』の五秘密思想の確立に注目しなければならない。不空は『理趣經』を翻訳されるとともに、理趣經法

関係の儀軌類をも訳されている。それは『大樂軌』『理趣會軌』『普賢軌』『瑜伽念誦儀軌』『五秘密軌』等である。また儀軌類には『時方成就儀』、藏漢の広経がある。

右の儀軌類に示された曼荼羅は、所伝によって内容は異なり四つの系統に分けられるが共通しているのは五秘密尊を中心とした十七尊曼荼羅である。その一例を示すなら、五秘密、春夏秋冬、嬉笑歌舞、鉤索鎖鈴の十七尊曼荼羅である。

この十七尊構成の曼荼羅は金剛界曼荼羅の基本構成と軌を一にする。その一例として四印会を見てみると、大日をとりにて、困む金剛薩埵 Aa、金剛宝 Ba、金剛法 Ca、金剛業 Da の五尊に嬉笑歌舞、香華燈塗、鉤索鎖鈴の十七尊である。ここに理趣經法はその曼荼羅を通して素直に金剛界曼荼羅と結び合うものを持っている。更に理趣法関係の儀軌の中で『理趣會軌』(JHE No. 1123)では、五秘密はそのまま大日をとる巻く阿閼、宝生、無量寿、不完成就と等しい境地であるとし、儀軌の次第の構成も『蓮華部心念誦儀軌』と同様のものがあ

る。つまり四方礼、金剛合掌、金剛眼、開心、入智、極喜三昧耶、大欲、大樂不空身、召罪、摧罪、業障除、成菩提心、五相成身、四仏（阿闍等）の真言文をも示している。

以上、理趣經法の構成を見ると、曼荼羅、儀軌次第を通して、初会金剛頂經の教理と密接に結ばれていることが分る。

このようなことは不空に限ることではなく、同時代のジュニヤーナ・ミトラの『百五十偈般若理趣疏』も同様に金剛界五部の配釈をしているといわれている。それ故、不空はこのような密教思想の土壌の中にあつて『理趣經』を捉えていたのである。したがつて大樂の清浄世界も五秘密十七尊の構成にならつて十七清浄句に整理され、これに金剛薩埵の真言「Om mahā-sukha-vajra-satvs jñā hūm baṃ hoh svatas tvam」を配釈していて大樂の曼荼羅は金剛界曼荼羅の原本的なものと異らないことを示している。

二 金剛界曼荼羅の教理の導入

『理趣經』の第二章から第六章までは金剛界曼荼羅の教理に準拠して説明されている。第二章毘盧遮那の法門は『理趣經』の智用を總論的に示すために、金剛界曼荼羅を總括的にしめくくる四印会の構成を借りて示している。つまり、金剛平等、義平等、法平等、業平等の世界は大円鏡智、平等性智、妙觀察智、成所作智によって開かれるものとし、それを

大日をとりにまく金剛薩埵 (4Aa)、『虚空藏 (4Ba)』、觀自在 (4Ca)、金剛業 (4Da) で示し、次章以下に展開される教理と実践の基礎を示そうとしているのである。

第三章降三世の章は金剛薩埵 (金剛手) の働きを説く章であるから、金剛界曼荼羅の金剛部 (阿闍) の曼荼羅で示せばよい。しかし、ここでは特に忿怒金剛の性格を力説するために、降三世品の降三世大曼荼羅の忿怒金剛部の立場で示している。即ち降三世を中心に忿怒の薩 (4Aa)、『王 (4Ab)』、愛 (4Ac)、『喜 (4Ad)』の尊で、この点は金剛界曼荼羅に即しながらも教理的な発展が見られるのである。

第四章觀自在菩薩の章は、自性清浄の立場で世界の真相を見抜くことを説く章であるから、觀自在菩薩を中尊とした法利因語の法部の曼荼羅で説き示す。第五章虚空藏の章は宝部の世界の実現を説く章であるから、宝光幢笑の宝部の曼荼羅で説き示す。第六章金剛拳の章は身口意の一切の行動が如来の働きとなつていくことを示す章であるから、業護牙拳の羯磨部の曼荼羅で示す。

以上のことを見ると、第二章では『理趣經』は金剛界の智の働きの總括的なものを示すものとみており、またそこに示された金剛薩埵 (降三世)、觀自在、虚空藏、金剛業の各尊で示された内容は第三章から第六章に展開して示され、而も金剛界曼荼羅十六大菩薩の世界を完成し、これをもとに金剛界

曼荼羅三十七尊の世界が完成されていくことを示そうとして
いるのである。

三 初会金剛頂經の教理の導入

以上述べたように第六章までで一応金剛界曼荼羅に配釈することが畢つたので、第七章以下第十一章は底辺にある八輪曼荼羅の思想をもとにしながらも、三十巻本の『初会金剛頂經』の教理内容をもとに『理趣經』の注釈がなされていく。

第七章文殊の章は般若の智慧がすべての世界の真相を把握していく無戲論智であることを力説する章である。經の説く諸法の空、無相、無願、光明の体得はすべて般若の働きによつて開かれるもので、これを金剛界品、降三世品、遍調伏品、一切義就品のそれぞれの文殊の働きとみている。このようにして『理趣經』では般若の空の体得は金剛頂經に示す全金剛界曼荼羅の世界を開いていくものとみるのである。

第八章転法輪の章は、前章を受けて般若の智は大輪の世界、即ち偉大な究極の曼荼羅の世界に引入させることを力説する章であるから、釈では金剛界曼荼羅六会、降三世曼荼羅十会（教勅の四会を含む）、遍調伏曼荼羅六会、一切義成就六会の全曼荼羅（初会金剛頂經所説の全世界）を悉く証得されるものであることを示している。

第九章虚空庫の章は般若の智用は供養の働きであることを力説する章である。この供養は菩提心供養、灌頂供養、法供養、羯磨供養の働きであり、それを金剛界曼荼羅の内の四供養である嬉鬘歌舞の尊で示し、金剛部、宝部、法部、羯磨部の働きが完成されるものと説く。

第十章摧一切魔の章は般若の智用が金剛忿怒の働きとなつていくことを力説した章である。この忿怒の働きを降三世、宝金剛忿怒、馬頭明王、忿怒羯磨で示し、金剛部、宝部、法部、羯磨部は忿怒の働きにより実現されるものであると説く。

第十一章一切平等の世界を開く普賢菩薩の章は、その働きが降三世教令にあつて始めて実現されることを力説した章である。ここでは忿怒降伏を通して金剛部、宝部、蓮華部（法部）羯磨部の大曼荼羅の世界が実現され、一切の平等が達成され、如来と衆生、仏と凡夫は一如平等となる。それを示すために『初会金剛頂經』に説かれた五類諸天（外金剛部諸天）を曼荼羅の中に配して、五類諸天が曼荼羅中尊の尊と一如であることを示している。

以上の如く第十一章は第二章以下第十章の内容をしめくくり、『理趣經』の精神は金剛界大曼荼羅の世界を実現していくとともに、『初会金剛頂經』の真髓を体得させていくものとし、如来と衆生は本来平等であり、衆生の心が開ければそ

のまゝ如来であることを力説しようとしている。このことを更に徹底して示したのが第十二章以下の教説である。それを外金剛部の教理によって示すのである。

四 外金剛部の教理の導入

第十二章から第十五章は衆生の心が開ければそれはそのまま如来であり、般若の智用は衆生をして如来たらしめることを力説するのである。第十二章の一切有情の如来蔵、金剛蔵（宝蔵）、妙法蔵、羯磨蔵はそのまま大円鏡智等の四智を産み出すものであるとし、この衆生に即して仏智を産み出す働きを普賢（金剛薩埵の働き）、虚空蔵、觀自在、一切金剛で示し、金剛部、宝部、法部、羯磨部の世界が自ら体得出来るとする。そしてこのことをより闡明にするために、魔醯首羅等の外金剛部の尊をもつて曼荼羅を示し、それが金剛界曼荼羅の真髓を示すものと説く。第十三章以下の七母天、三兄弟、四姉妹の章も同様のパターンである。

五 金剛界曼荼羅の完成

第十六章では般若の真髓は無量無辺究竟の体得であつて、それは毘盧遮那如来の心そのものと説く。ここでは第二章で示された毘盧遮那のさとりは、衆生自らのものとして完成されたことを示している。この有様を金剛界曼荼羅の教理をも

つて説いていく。つまり如来部を始め金剛部、宝部、羯磨部の世界はそれぞれ五部の徳を有しその徳は無限に拡がっていく。例えば一つの勝れた宗教の体験はそのまま五部具有の如来の心に解れ、その心にはまた五部の深い世界を聞き、広大な無辺な金剛界曼荼羅の世界が体得されていくことを示そうとしているのである。

而してこの深く広い体験が第十七章五秘密の世界の体得であるとする。それはまた第一章で示した大樂の世界の体得であり、ここに十七清淨句の世界が味得されて、金剛界曼荼羅の核心となる十六大菩薩の生命が得られると説く。

むすび

以上不空の『理趣釈』をみて、基本的には五秘密思想が確立し、五秘密十七尊の曼荼羅の世界が初会金剛頂経とその世界を表示した金剛界曼荼羅の世界に素直に結ばれていった。

これをもとに金剛界曼荼羅と『初会金剛頂経』の教理を縦横にとり入れて『理趣経』を解釈した。そして究極には般若思想は金剛頂経の真髓を示すものとし、『唯識論』にいわれる「一心真見道、十六相見道」の思想を金剛界曼荼羅の核心となる十六大菩薩生に発展させていったのである。

（寺院住職）